

2025年10月26日 主日礼拝メッセージ

聖書:ホセア書11章8~12節

説教:あなたを見捨てない

はじめに

きょうのタイトルで思い出すできごとがあります。まだ小学生の3、4年生くらいのときです。ときどき家に泊まりに来て妹のように一緒に遊んでいた二つ下のいとこがいました。そのいとこと山の中にある親戚の家に遊びに行った帰りのことです。日が暮れて暗くなった山道を歩いていたのですが、私はいとこをからかおうと思いつき、いきなり走り出して木の陰に隠れたのです。そうしたらひとりぼっちにされたいとこは泣き出していました。これを見て私はちょっとやり過ぎたと反省し、こんどは手を握りながら家に帰りました。真っ暗な道の途中で見捨てられることがどんなに悲しいことか心に刻みつけられた思い出です。

今日の箇所に「イスラエルよ。どうしてあなたを見捨てることができるだろうか」とあります。うれしいことばではありますが、なぜ神はこのように言われるのか。また、見捨てないと言うのならば、具体的にはどのようなかたちでそのことを私たちに表して下さるのか。今日の箇所からご一緒に考えてまいります。

1 神とイスラエル

1) 腕に抱き歩くことを教えた

今日のところは前回からの続きになりますので、簡単に振り返っておきます。神はイスラエルのことをまるで小さな子どものようにご覧になり、3節前半ではこう語っていました。「このわたしがエフライムに歩くことを教え、彼らを腕に抱いたのだ。」出エジプト記の時代、イスラエルの民はモーセに率いられてエジプトから脱出し、カナンの地をめざします。準備万端整えて出発したわけではなく、取るものも取りあえずというような急な出發でした。その時の数が男子だけで六十万人だったと言われています。そんな大勢の集団をまとめ上げていくためには、きちんとした組織と法律が必要です。ところがそんなものはなにもありません。ゼロからの出發です。そこで主はモーセを呼び寄せて、シナイ山に登らせて十の戒めを記した石の板をわたし、幕屋のつくりかたを教え、組織の作り方を教え、ひとつひとつ丁寧に導かれました。このようにして神は、イスラエルを育てました。

2) 欺きと偽り

子どもを育てたことのある方ならおわかりのように、なかなか思うように行かない。よい息子娘に育ってくれればありがたいのですが、大抵はそうではない場合が多い。それで悩みます。実は神も同じでした。イスラエルのことを愛して一生懸命育てたのに、そのイスラエルは親の恩を忘れ、離れて行き、12節にあるように偽りと欺きで一杯のどちら息子、どちら娘になってしまい、やりたい放題です。お前なんか自分の親ではない。私の親はバアルなのだと言って、せつせといけにえを献げ、ありがたいと併んでいる始末です。

2 アデマ、ツェボイム

1) ソドムとゴモラで起きたこと

神はそのことをどのようにご覧になっていたのか。8節前半を読みます。「エフライムよ。わたしはどうしてあなたを引き渡すことができるだろうか。イスラエルよ。どうしてあなたを見捨てることができるだろうか。どうしてあなたをアデマのよう引き渡すことができるだろうか。どうしてあなたをツェボイムのようになることができるだろうか。」

ここにアデマとツェボイムという町の名前が出てきます。みなさんソドムとゴモラという町はご存じでしょう。悪が満ちていると言われて神の怒りである硫黄の火が降って滅ぼされた町ですが、あのときソドムとゴモラと一緒に出てくるのがアデマとツェボイムです。ですから8節は、「どうしてあなたをソドムとゴモラのよう引き渡すことができるだろうか」と言っているのと同じで、イスラエルをさばくことはしないというのです。

2) 甘い親のような神なのか

でも、悪があふれていたソドムとゴモラは滅ぼされたのであれば、どちら息子、どちら娘になり果てて、町で大暴れしているようなイスラエルを神は当然さばくべきではないでしょうか。それなのにどうしてさばかないと言うのでしょうか。子どもに甘い親というのがいます。子どもが主人のようになり、親は子どもが欲しいというものをどんどん買与え、よそでひどいことをしてきても「うちの息子に限ってそんな悪いことはしない」とかばう。だれでもこんな親子関係は問題があると言うでしょう。

神もそんな方なのでしょうか。もちろんそんなことはありません。

3) 正しい人が十人でもいるなら

ソドムとゴモラのことを思い出してみましょう。神が、あの町を滅ぼそうとしているというのを聞いたアブラハムは、このように言いました。創世記18章24節。「もしかすると、その町の中に正しい者が五十人いるかもしれません。あなたは本当に彼らを滅ぼし尽くされるのですか。その中にいる五十人の正しい者のために、その町をお赦しにならないのですか。」主はこれに対して「わたしが正しい者を五十人、町の中に見つけたら、その人たちのゆえにその町のすべてを赦そう」と言われました。しかしアブラハムはこれでも満足できず、いろいろな駆け引きをした結果、十人の正しい者がいたならソドムとゴモラを赦すという約束を引き出します。

これがホセア書を考えるときの大きな手がかりになります。神が、イスラエルを見捨てることができない、引き渡すことができないと言うのであれば、そこには正しい人がいないといけないことになる。これが絶対条件です。でもイスラエルに正しい人はどれだけいたのか。ホセアはその一人に數えてもよいかも知れない。でもイスラエル全体を救うためにはまったく足りません。

3 神は見捨てない

1) 正しい方を遣わす

そこでどうするか。イスラエルの中に正しい人が見つからないのなら、神ご自身が正しい人を用意するしかありません。それで神のひとり子であるイエス・キリストを私たちのところに遣わしました。ソドムとゴモラの場合は十人の正しい人が必要でした。イスラエル全体を救うために、たった一人では全然足りないのではないか。数だけ見ればそんな計算になります。でも、大切なのは中身、質です。人間にはどんなに正しい人であろうと限界があります。ですから何十人もそろえないといけない。しかし9節後半にこうあります。「わたしは神であって、人ではなく、あなたがたのうちにいる聖なる者だ。わたしは町に入ることはしない。」

この方は人ではなく神です。罪のない聖なる方です。だから一人で十分なのです。しかし一つだけ困ったことがある。神のお姿をとったままでは、町に入りません。これでは私たちのところに来ることができない。そこでどうしたか。イエス・キ

リストは神の子であられるのに、人となられ、町に住んでください、私たちが味わう苦しみをすべて味わってくださいました。このようにしてイエス・キリストという聖なる方が来られたので神は私たちをさばかなくともよくなつた。

2) あわれみで胸が熱くなっている

ホセア書をこれまでずっと見てきて、いつもイスラエルに怒りを燃やしている神の姿がほとんどでした。それが今日の箇所では、一転します。私たちにはありがたいことですが、よく考えると、神はどうしてそこまでされるのかと不思議もあります。自分の子どもがとんでもない乱暴者だったら、とてもここまで愛せないでしょう。神のうちになか特別な原動力のようなものがなければここまで言えない。そのことが8節後半に書いてあります。「わたしの心はわたしのうちで沸き返り、わたしはあわれみで胸が熱くなっている。」心が沸き返るほど、胸が熱くなるほどどこまでもどこまでも、神はイスラエルを愛し続けています。イエス・キリストがなぜ私たちのところへ来られたのは、神のうちにこのような思いがあつたからだったのです。

3) 家に住まわせよう

私が若いとき、親の気持ちがわからず、このイスラエルのようにただひたすら親から逃げたいと考え、親から自由になりたいと思っていました。そうすれば自分の通りの生き方ができて幸せになれると思っていました。そんな私が、子どもを育てるようになって初めて親の気持ちがわかつてきた。でもそのときには、すでに父親はなくなっていました。

私たちは神のこの熱い思いをどこまで知っているのだろうかと思われます。神を知ることについてはどこまでも鈍い者です。でも神はそんな私たちを待ってくださることも知っています。いまは神から離れていても、いつか神のもとに立ち返るのを待っている。神はただ待っているではありません。11節後半にこうあります。「私は彼らを私たちの家のに住まわせよう。」私たちの本当の住まいを用意して待ってくださっています。その家がある天の御国に向かう入り口が十字架です。主は十字架を立ててここに戻りなさい。そこに神の愛があふれているから。主はそのように語ってくださいます。この神とともに歩んでまいります。